

# 長尾城(敷根城)

## 探訪



長尾城北側(船川)付近で見つけた花

- 長尾城(敷根城)の立地……………①～②
- 資料(山城・曲輪・土塁の解説)……………③
- 長尾城略地図(池田文哉氏作成)……………④
- 長尾城周辺衛星写真－1……………⑤
- 比較資料(苦辛城)……………⑥
- 長尾城址写真……………⑦～⑪
- 長尾城の城主敷根氏(土岐氏)……………⑫
- 年 表……………⑬～⑭
- 六地藏塔の碑文……………⑮

## 長尾城（敷根城）の立地

敷根より国道 220 号線を福山方面へ向かい、亀割峠の停留所を左折し、旧国道 10 号線へ行くと清掃工場があり、この清掃工場の手前に今は操業していない旧清掃工場があります。旧清掃工場より北側へ地図上で約500メートル離れたところ(標高 245m)に長

尾城址、(別名:敷根城)があります。地元の人は単に「城山」と呼び、  
三国名勝図会では地頭館より卯の方(東の方)へ二十四町、山頂の  
周囲が約二十一町(2300 メートル)と記されています。城の構成は本丸・西城(西の丸)・三の丸からなっていて、本丸と西城(西の丸)の間は約 130 メートル離れていて、大小幾つかの曲輪くるわがあり、本丸の領域と西城(西の丸)の間は深い切通し(本丸東の空堀より深いようです)で区切ら



れている。また西の丸の西(大手口の西)に深い凹地があり、その西に陣の平と呼ばれる台地があります。三国名勝図会には「馬場の跡等残れり」と有りますが現在にははっきりと馬場と分かるようなものは残っていません。本丸の北側に緩やかな斜面が少しあり、西城(西の丸)の北側が多少開けた場所があるのでこの辺りだったのかもしれませんが。長尾城の北側には溪谷があり谷には泉が湧きだし下の方は船川と呼ばれていたそうです。現在でも城の北側には、高橋川の支流の小川が流れています。

そして、本丸跡の一部高くなった所には、軍神応神天皇・神功皇后を祀った若宮神社跡(現在は医師神社に合祀)と山の神の石碑が今も残っています。若宮神社跡は小高くなっていて雑木に囲まれた場所にあるので、本丸跡に来ても見つけにくいかもしれません。

西城(西の丸)の南西側のすぐ下の方には、大手口だったと思われる場所があり、自然石の配置うまく利用した入り口と、山を切り通して作ったと思われる通路などが良く残されています。

大手口の下には繩掛松なわかけまつと呼ばれる二股に分かれた大木の松が有ったそうで、この松より西側を外園と呼び、東側を内園呼んでいました。

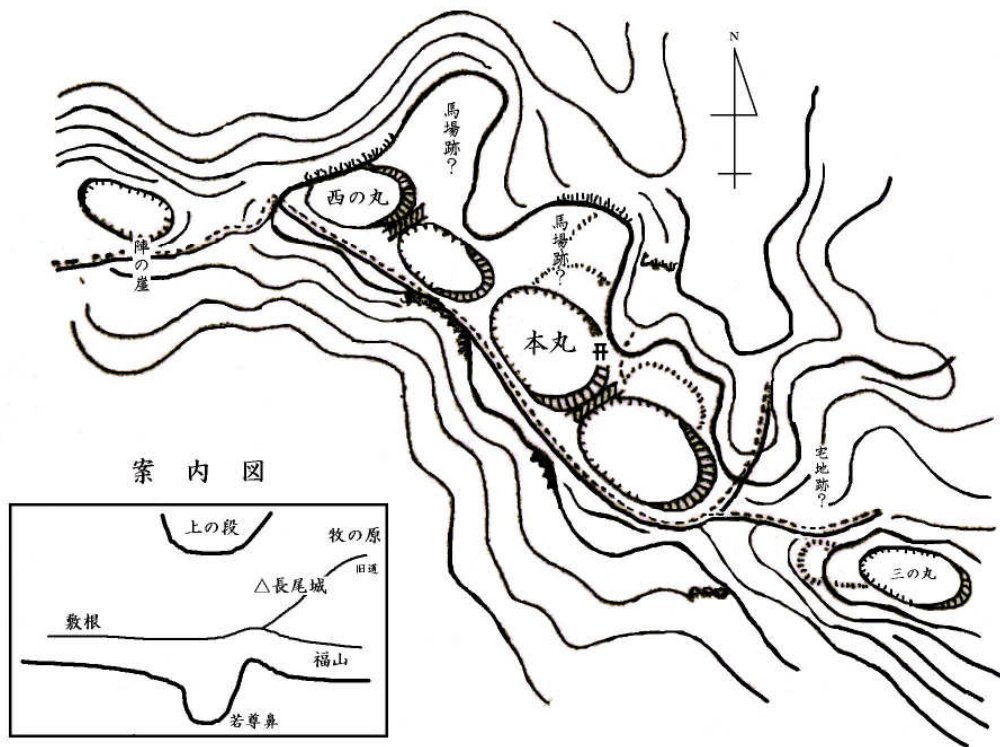
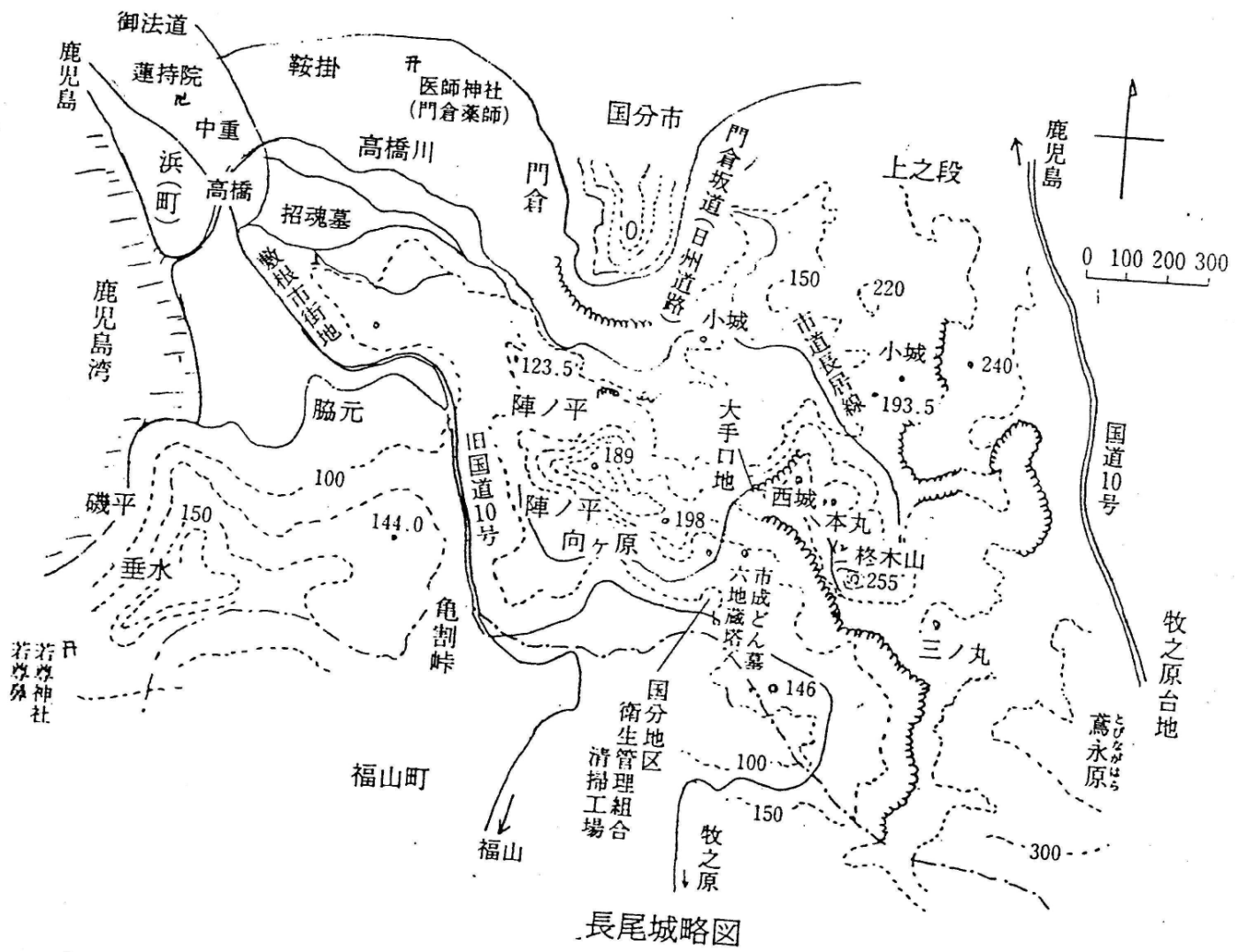
この城は、高橋川の溪谷を挟み反対側に日州通道(門倉坂)を望み、南側のがけ下には亀割峠から七曲坂を通る道があり、大隈地方・日向都城地方から敷根・国分平野を通り、鹿児島・薩摩地方へ向う交通の要衝にあり攻防の要かなめの城だったようです。現在も長尾城から門倉坂や清掃工場がよく見えることから解ります。



**山城(やまじろ)**は、陰阻な山を利用して築かれた城。日本においては、江戸時代の軍学者によって分類された地形による城の分類法の一つ。要塞は、防御に有利な地形に築くことが望ましく、険しい山はその条件を満たすが、反面住むには不便で、守るべき対象である人の居住地から離れている。そのため、防御専用の要塞として作られることが多い。平時は麓に住民と共に城主が住み、敵が来襲すると山上の城に立て籠もると言った使い方である。日本では戦国後期に支配の象徴として城が作られるようになると城下町のついた平山城、平城が主流となった。小城の場合は、山の頂上に簡単な建物を作り食料、武具を保管するだけで、後は自然の地形を利用して、適宜、山の各所に柵、堀、土塀を設けるといった程度であるが、中規模の城となると峰々に本丸、二の丸といった建物を作り、居住用の施設も備え、長期の籠城に耐えられるようにした。大城となると周辺の山々に支城を設け、山系全体が巨大な要塞となる。

**曲輪(くるわ)**とは、城郭内にある一定区画を分かち区域である。郭(くるわ)とも書く(輪郭を意識したときに「郭」、内部の平地を意識したときに「曲輪」と使い分けることもある)。江戸時代以降は丸ともいう。曲輪は、防御陣地・建造物を建てる敷地・兵の駐屯施設として、城郭の最重要施設である。中世の城郭では(主に山城)多数の小規模な曲輪をもつものが多く、近世の城郭(主に平城)では少数の大規模な曲輪をもつものが多いと言われる。

**土塁(どるい 英:earthwork fortification)**とは、敵や動物の侵入を防ぐため、古代から近世にわたって、城、寺、豪族の住居、集落などの周囲に築かれた連続した土盛りのこと。容易に越えることができない高さをもつ。堀と組みとして作られ、堀を掘った土で作られることが多い。土居、土手ともいう。奈良時代などに、丁寧に土をつき固めて作ったものは、版築土塁と呼ぶ。それに対して、土をただ盛って作った土塁を掻き揚げ土塁ということがある。土塁は、郭(くるわ、平坦部のこと)の周囲に作られることが多い。数箇所に開口部を作り、そこに門を構えて虎口(こぐち)という出入り口を作る。郭の角部などでは土塁の幅を広くすることがあり、そこは櫓台(やぐらだい)と呼ばれている。一部または全部の郭に土塁のない城も多い。土塁の上部には柵列を作ることもあったようだが、発掘してもピット(柱穴)が検出されることは少ない。場合によっては、上部に土塀が築かれたかもしれない。主郭(しゅかく)と第二郭など、上位と下位の二つの郭の境界に堀がある場合、上位の郭の堀側には土塁があり、下位の郭の堀脇には土塁がないことがある。逆に、堀脇の土塁のあるなしで、郭の上下関係が分かることがある。斜面に縦に作られた土塁を、**豎土塁(たてどるい)**と呼ぶ。



池田文哉氏作成



国道10号線

高橋川

国道220号線

脇元

小城

小城

陣ノ平

大手口 →

西城

本丸

陣ノ平

本丸  
榑木山

市成どん墓

六地藏塔

向ヶ原

三ノ丸

清掃工場

image © 2007 DigitalGlobe  
image © 2007 TerraMetrics

© 2007 ZENRIN

ポインタ 31° 41'35.44" N 130° 48'51.95" E 高度 504 フィート

ストリーミング 100%

上空 6961 フィート

© 2007 Google™

## くららじょう 比較資料(苦辛城)

在りし日の長尾城の姿を解りやすくするために、比較のための資料として鹿児島市の現在皇徳寺台(皇徳寺団地)に有った苦辛城の模型(鹿児島市立ふるさと考古歴史館展示)を添付しておきます。現在の長尾城址の様子と比較し800年の昔に思いを寄せてみてください。



全 景



曲 輪



曲 輪

くらら  
苦辛城は建治2年(1276年)頃(初代国房が敷根村を賜ったのが元暦元年・1184年)、山田氏によって築城され、城の構成は本丸・二の丸・三の丸と郭が15ヶ所、堀が20ヶ所で各所に腰曲輪、帯曲輪、段状の曲輪などで構成されている。

現在は造成され皇徳寺ニュータウンになっている。

鹿児島市立ふるさと考古歴史館

住所：鹿児島市下福元町3763番地

電話：099-226-0696

<http://www.museum.or.jp/furusato/>

JR 指宿枕崎線・慈眼寺駅より徒歩15分

午前9時～午後5時 月曜日休刊日

入館料：一般300円 小中学生150円(2007年現在)



# 長尾城の全景・北側の麓 (平成19年5月撮影)



亀割峠・福山側から見た長尾城。新しい清掃工場の左側、旧清掃工場裏の断崖絶壁の上に長尾城があります。手前の山のさらに奥の少し霞んで見える尾根です。



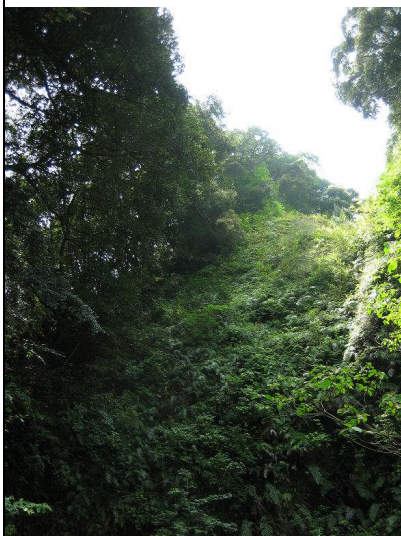
上之段(敷根に下る坂の途中)から見た長尾城。



長尾城北側の麓から見上げた写真です



長尾城北側に流れる小川(船川?)のせせらぎ。澄んだ流れが今でもあります。



長尾城北東側にある崖。長尾城は周囲をこのような崖で囲まれています。



崖の高さは20~30メートル以上あります。

車で行くことの出来る林道から頂上・本丸跡までは徒歩20分前後・本丸跡から西の丸跡までは10分程度です。途中傾斜のきつい所がありますが、登りきると比較的平らな場所が棚田状にあります。

- ※ 登山をされる際は準備をしっかりと、傾斜のきつい箇所は滑落に気をつけてください。
- ※ 城跡のふちは崖地になっていたり堀跡などがあるので、足元には気をつけてください。